

# こころ

夏目漱石

## 上 先生と私

### 一

私はその人を常に先生と呼んでいた。わたくしだからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚はばかる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び

起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執とつても心持は同じ事である。よそよそしい頭文字かしらもちなどはとても使う氣にならない。

私が先生と知り合いになつたのは鎌倉かまくらである。その時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来いという端書はがきを受け取つたので、私は多少の金を工面くめんして、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日にさんちを費やした。

ところが私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、

私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断つて

あつたけれども友達はそれを信じなかった。友達は

かねてから国元にいる親たちに勧<sup>すす</sup>まない結婚を強<sup>し</sup>い

られていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するに

はあまり年が若過ぎた。それに肝心<sup>かんじん</sup>の当人が気に入

らなかった。それで夏休みに当然帰るべきところを、

わざと避けて東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようかと相談をした。私にはどうしてもいいか分らなかった。けれども實際彼の母が病気であるとすれば彼は固よりもと帰るべきはずであつた。それで彼はとうとう帰る事になつた。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大分だいぶん日数ひかずがあるので鎌倉におつてもよし、帰つてもよいという境遇にい

た私は、当分元の宿に留<sup>と</sup>まる覚悟をした。友達は中国のある資産家の息子<sup>むすこ</sup>で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがって一人<sup>ひとり</sup>ぼっちになつた私は別に恰好<sup>かつこう</sup>な宿を探す面倒ももたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺鄙<sup>へんぴ</sup>な方角にあつた。玉突き<sup>たまつき</sup>だのアイスクリームだのというハイカラなものには長い暇<sup>なわて</sup>

を一つ越さなければ手が届かなかった。車で行っても二十銭は取られた。けれども個人の別荘はここここにいくつでも建てられていた。それに海へはごく近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燠くすぶり返つた藁わらぶき葺あいだの間を通り抜けて磯いそへ下りると、この辺へんにこれほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑

に來た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の中が錢湯せんとうのように黒い頭でごちやごちやしている事もあつた。その中に知つた人を一人ももたない私も、こういう賑にぎやかな景色の中に裏つつまれて、砂の上に寝ねそべつてみたり、膝頭ひざがしらを波に打たしてそこいらを跳はね廻まわるのは愉快であつた。

私は實に先生をこの雑沓ざつとうの間あいだに見付け出したのである。その時海岸には掛茶屋かけぢややが二軒あつた。私はふ

とした機会はずみからその一軒の方に行き慣なれていた。

長谷辺はせへんに大きな別荘を構えている人と違って、各自めいめい

に専有の着換場きがえばを拵こしらえていないここいらの避暑客に

は、ぜひともこうした共同着換所といった風ふうなもの

が必要なのであった。彼らはここで茶を飲み、ここ

で休息する外ほかに、ここで海水着を洗濯させたり、こ

こで鹹しおはゆい身体からだを清めたり、ここへ帽子や傘かさを預

けたりするのである。海水着を持たない私にも持物



を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいるたびにその茶屋へ一切いっさいを脱ぬぎ棄すてる事ことにしていた。

## 二

わたくし

私わたしがその掛茶屋で先生を見た時は、先生がちょう

ど着物を脱いでこれから海へ入ろうとするところで

あつた。私はその時反対に濡ぬれた身体からだを風に吹かし

て水から上がって来た。二人の間あいだには目を遮さへぎる幾多

の黒い頭が動いていた。特別の事情のない限り、私

はついに先生を見逃したかも知れなかった。それほど浜辺が混雑し、それほど私の頭が放漫ほうまんであつたにもかかわらず、私がすぐ先生を見付け出したのは、先生が一人の西洋人を伴つれていたからである。

その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否いなや、すぐ私の注意を惹ひいた。純粹の日本の浴衣ゆかたを着ていた彼は、それを床几しょうぎの上にすぽりと放ほうり出したまま、腕組みをして海の方を向いて立って

いた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。私にはそれが第一不思議だった。私はその二日前に由井が浜まで行って、砂の上にしゃがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻をおろした所は少し小高い丘の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。

女は殊更肉を隠しがちであつた。大抵は頭に護謨製ゴムせい

の頭巾ずきんを被かぶつて、海老茶えびちゃや紺こんや藍あいの色を波間に浮か

していた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼め

には、猿股一つで済まして皆みんななの前に立っているこ

の西洋人がいかにも珍しく見えた。

彼はやがて自分の傍わきを顧みて、そこにござんでい

る日本人に、一言二言何かいひとことふたことった。その日本人は砂

の上に落ちた手拭てぬぐいを拾い上げているところであつた

が、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人がすなわち先生であつた。

私は単に好奇心のために、並んで浜辺を下りて行

く二人の後姿を見守つていた。うしろすがたすると彼らは真直にまっすぐ

波の中に足を踏み込んだ。そうして遠浅の磯近くとおあさ いそぢかに

わいわい騒いでいる多人数たにんずの間を通り抜けて、比較

的広々した所へ来ると、二人とも泳ぎ出した。彼ら

の頭が小さく見えるまで沖の方へ向いて行つた。それから引き返してまた一直線に浜辺まで戻つて来た。掛茶屋へ帰ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身体からだを拭ふいて着物を着て、さっさとどこへか行つてしまつた。

彼らの出て行つた後あと、私はやはり元の床几しょうぎに腰をおろして烟草タバコを吹かしていた。その時私はぽかんとしながら先生の事を考えた。どうもどこかで見た事

のある顔のように思われてならなかった。しかしどうしてもいつどこで会った人が想い出せずにしまった。

その時の私は屈托くつたくがないというよりむしろ無聊ぶりように

苦しんでいた。それで翌日あくるひもまた先生に会った時刻

を見計らって、わざわざ掛茶屋かけぢややまで出かけてみた。

すると西洋人は来ないで先生一人麦藁帽むぎわらぼうを被かぶってや

って来た。先生は眼鏡めがねをとって台の上に置いて、す

てぬぐい

ぐ手拭で頭を包んで、すたすた浜を下りて行つた。

きのう

よくかく

先生が昨日のように騒がしい浴客の中を通り抜けて、

あと

一人で泳ぎ出した時、私は急にその後が追いつけた

はね

くなつた。私は浅い水を頭の上まで跳かして相当の

めじるし

ぬきで

深さの所まで来て、そこから先生を目標に抜手を切

こせん

えが

つた。すると先生は昨日と違って、一種の弧線を描

いて、妙な方向から岸の方へ帰り始めた。それで私

おか

の目的はついに達せられなかつた。私が陸へ上がつ



て雫しずくの垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちゃんと着物を着て入れ違いに外へ出て行つた。

### 三

私わたくしは次の日も同じ時刻に浜へ行つて先生の顔を見た。その次の日にもまた同じ事を繰り返した。けれども物をいい掛ける機会も、挨拶あいさつをする場合も、二人の間には起らなかった。その上先生の態度はむし

る非社交的であつた。一定の時刻に超然として来て、また超然と歸つて行つた。周囲がいくら賑にぎやかでも、それにはほとんど注意を払う様子が見えなかつた。最初いっしょに來た西洋人はその後ごまるで姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或ある時先生が例の通りさつさと海から上がつて来て、いつもの場所に脱ぬぎ棄すてた浴衣ゆかたを着ようとする  
と、どうした訳か、その浴衣に砂がいっぱい着いて

いた。先生はそれを落すために、後ろ向きになって、浴衣を二、三度振ふるった。すると着物の下に置いてあった眼鏡が板の隙間すきまから下へ落ちた。先生は白しろ紺がすりの上へ兵児帯へこおびを締めてから、眼鏡の失なくなったのに気が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛こしかけの下へ首と手を突ッ込んで眼鏡を拾い出した。先生は有難うといつて、それを私の手から受け取った。

次の日私は先生の後あとにつづいて海へ飛び込んだ。

そうして先生といっしよの方角に泳いで行つた。二

ちょう

丁ほど沖へ出ると、先生は後ろを振り返って私に話

し掛けた。広い蒼い海あおの表面に浮いているものは、

その近所に私ら二人より外ほかになかった。そうして強

い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしてい

た。私は自由と歡喜に充みちた筋肉を動かして海の中

で躍おどり狂つた。先生はまたぱたりと手足の運動を已や

めて仰向けになったまま浪なみの上に寝た。私もその真似まねをした。青空の色がぎらぎらと眼を射るように痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですね」と私は大きな声を出した。

しばらくして海の中で起き上がるように姿勢を改めた先生は、「もう帰りませんか」といって私を促した。比較的強い体質をもった私は、もっと海の中で遊んでいたかった。しかし先生から誘われた時、

私はすぐ「ええ帰りましょう」と快く答えた。そうして二人でまた元の路を浜辺へ引き返した。

私はこれから先生と懇意になった。しかし先生がどこにいるかはまだ知らなかった。

それから中<sup>なか</sup>二日おいてちょうど三日目の午後だっ

たと思う。先生と掛<sup>かけ</sup>茶屋で出会った時、先生は突然

私に向かつて、「君はまだ大分<sup>だいぶん</sup>長くここにいるつもりですか」と聞いた。考えのない私はこういう問い

に答えるだけの用意を頭の中に蓄えていなかった。  
それで「どうだか分りません」と答えた。しかしに  
やにや笑っている先生の顔を見た時、私は急に極きまり  
が悪くなった。「先生は？」と聞き返さずにはいら  
れなかった。これが私の口を出た先生という言葉の  
始まりである。

私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通  
の旅館と違って、広い寺の境内けいだいにある別荘のような

建物であつた。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解わかつた。私が先生先生と呼び掛けるので、

先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の口癖くちくせだといつて弁解した。私はこの間の西洋人の

事を聞いてみた。先生は彼の風変りのところや、も

う鎌倉かまくらにいない事や、色々の話をした末、日本人に

さえあまり交際つきあいをもたないのに、そういう外国人と

近付ちかづきになつたのは不思議だといつたりした。私は



最後に先生に向かつて、どこかで先生を見たように  
思うけれども、どうしても思い出せないといった。

若い私はその時暗あんに相手も私と同じような感じを持

つていはしまいかと疑った。そうして腹の中で先生

の返事を予期してかかった。ところが先生はしばら

く沈吟ちんぎんしたあとで、「どうも君の顔には見覚えみおぼがあ

りませんね。人違いじゃないですか」といったので

私は変に一種の失望を感じた。

## 四

わたくし

私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅たくへ伺つても宜よござんすか」と聞いた。先生は単簡たんかんにただ「ええいらつしやい」といっただけであつた。その時分の私は先生とよほど懇意になつたつもりでいたので、先生からもう少し濃こまやかな言葉を予期して掛かつたのである。

それでこの物足りない返事が少し私の自信を傷めた。いた

私はこういう事でよく先生から失望させられた。

先生はそれに気が付いているようでもあり、また全く気が付かないようでもあった。私はまた軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれなかった。むしろそれとは反対で、不安に揺うごかされるたびに、もつと前へ進みたくなっ

た。もっと前へ進めば、私の予期するあるものが、  
いつか眼の前に満足に現われて来るだろうと思った。  
私は若かった。けれどもすべての人間に対して、若  
い血がこう素直に働こうとは思わなかった。私はな  
ぜ先生に対してだけこんな心持が起るのか解らな<sup>わか</sup>か  
った。それが先生の亡くなった今日<sup>こんにち</sup>になって、始め  
て解って来た。先生は始めから私を嫌っていたので  
はなかったのである。先生が私に示した時々<sup>そっけ</sup>の素気

あいさつ

ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかったのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づくほどの価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものとみえる。

私は無論先生を訪ねるつもりで東京へ帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはまだ二週間の日数

ひかず

があるので、そのうちに一度行っておこうと思った。  
しかし帰って二日三日と経<sup>た</sup>つうちに、鎌倉<sup>かまくら</sup>にいた時  
の気分が段々薄くなつて来た。そうしてその上に彩<sup>いろど</sup>  
られる大都会の空気が、記憶の復活に伴う強い刺戟<sup>しげき</sup>  
と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往来で学生  
の顔を見るたびに新しい学年に対する希望と緊張と  
を感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まって、一カ月ばかりすると私の心に、

また一種の弛<sup>たる</sup>みができてきた。私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の室<sup>へや</sup>の中を見廻<sup>みまわ</sup>した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私はまた先生に会いたくなつた。

始めて先生の宅<sup>うち</sup>を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覚えている。晴れた空が身に沁<sup>し</sup>み込むように感ぜられる好<sup>い</sup>日<sup>ひ</sup>和<sup>より</sup>であつた。その日も先生は留守であつた。鎌倉にいた時、

私は先生自身の口から、いつでも大抵宅たいていにいるとい

う事を聞いた。むしろ外出嫌いだという事も聞いた。

二度来て二度とも会えなかった私は、その言葉を思

い出して、理由わけもない不満をどこかに感じた。私は

すぐ玄関先を去らなかつた。下女げじょの顔を見て少し

躊躇ちゅうちよしてそこに立っていた。この前名刺を取り次い

だ記憶のある下女は、私を待たしておいてまた内うちへ

はいった。すると奥さんらしい人が代って出て来た。



美しい奥さんであつた。

私はその人から鄭寧ていねいに先生の出先を教えられた。

先生は例月その日になると雑司ぞうしヶ谷の墓地にある或ある仏へ花を手向けたむけに行く習慣なのだそうである。

「たった今出たばかりで、十分になるか、ならないかでございます」と奥さんは気の毒そうにいつてくれた。私は会釈えしやくして外へ出た。賑にぎやかな町の方へ一丁ちようほど歩くと、私も散歩がてら雑司ヶ谷へ行ってみる

気になった。先生に会えるか会えないかという好奇心も動いた。それですぐ踵きびすを回めぐらした。

## 五

わたくし

私は墓地の手前にある苗畠なえばたけの左側からはいって、

かえで

両方に楓を植え付けた広い道を奥の方へ進んで行っ

はず

た。するとその端れに見える茶店ちやみせの中から先生らし

めがね

い人がふいと出て来た。私はその人の眼鏡の縁ふちが日

に光るまで近く寄って行つた。そうして出し抜けに

「先生」と大きな声を掛けた。先生は突然立ち留まって私の顔を見た。

「どうして……、どうして……」

先生は同じ言葉を二遍へん繰り返した。その言葉は森閑しんかんとした昼の中うちに異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも応こたえられなくなった。

「私の後あとを跟つけて来たのですか。どうして……」

先生の態度はむしろ落ち付いていた。声はむしろ

沈んでいた。けれどもその表情の中には判然うちいえないような一種の曇りがあつた。

私は私がどうしてここへ来たかを先生に話した。

「誰だれの墓へ参りに行つたか、妻さいがその人の名をいいましたか」

「いいえ、そんな事は何もおつしやいません」

「そうですか。——そう、それはいうはずがありませんね、始めて会つたあなたに。いう必要がないん

だから」

先生はようやく得心とくしんしたらしい様子であつた。しかし私にはその意味がまるで解わからなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。

依撒伯拉イサベラ何々の墓だの、神僕しんぼくロギンの墓だのという

傍かたわらに、一切衆生いっさいしゆじょう悉有しつじう仏生ぶつしょうと書いた塔婆とうばなどが建てて

あつた。全権公使何々というのもあつた。私は安得

烈ほと彫り付けた小さい墓の前で、「これは何と読む

んでしょう」と先生に聞いた。「アンドレとでも読ませるつもりでしょうね」といって先生は苦笑した。

先生はこれらの墓標が現わす人種ひとさま々の様式に対し

て、私ほどに滑稽こっけいもアイロニーも認めてないらしか

った。私が丸い墓石はかいしだの細長い御影みかげの碑ひだのを指し

て、しきりにかれこれいいたがるのを、始めのうち

は黙って聞いていたが、しまいには「あなたは死とい

う事実をまだ真面目まじめに考えた事がありませぬね」と  
いった。私は黙った。先生もそれぎり何ともいわな  
くなつた。

墓地の区切り目に、大きな銀杏いちょうが一本空を隠すよ  
うに立っていた。その下へ来た時、先生は高い梢こずえを  
見上げて、「もう少しすると、綺麗きれですよ。この木  
がすっかり黄葉こうようして、ここいらの地面は金色きんいろの落葉  
で埋うずまるようになります」といった。先生は月に一

度ずつは必ずこの木の下を通るのであった。

向うの方で凸凹でこぼこの地面をならして新墓地を作っている男が、鋤くわの手を休めて私たちを見ていた。私たちはそこから左へ切れてすぐ街道へ出た。

これからどこへ行くという目的あてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生はいつもより口数を利きかなかつた。それでも私はさほどの窮屈を感じなかつたので、ぶらぶらいつしよに歩いて行つた。



「すぐお宅へお帰りですか」

「ええ別に寄る所ありませんから」

二人はまた黙って南の方へ坂を下りた。

「先生のお宅の墓地はあすこにあるんですか」と私がまた口を利き出した。

「いいえ」

「どなたのお墓があるんですか。——ご親類のお墓

ですか」

「いいえ」

先生はこれ以外に何も答えなかった。私もその話はそれぎりにして切り上げた。すると一町ちやうほど歩いた後で、先生が不意にそこへ戻あとつて来た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「お友達のお墓へ毎月お参まいげつりをなさるんですか」

「そうです」

先生はその日これ以外を語らなかつた。

## 六

私はそれから時々先生を訪問するようになった。

行つたたびに先生は在宅であつた。先生に会う度数が  
重なるにつれて、私はますます繁く先生しげの玄関へ足  
を運んだ。

けれども先生の私に対する態度は初めて挨拶をし  
た時も、懇意になつたその後のちも、あまり変りはなか

った。先生は何時いつも静かであつた。ある時は静か過ぎて淋さびしいくらいであつた。私は最初から先生には近づきがたい不思議があるように思っていた。それでいて、どうしても近づかなければいけないという感じが、どこかに強く働いた。こういう感じを先生に対してもっていたものは、多くの人のうちであるいは私だけかも知れない。しかしその私だけにはこの直感が後のちになつて事実の上に証拠立てられたの

だから、私は若々しいといわれても、馬鹿ばかげている  
と笑われても、それを見越した自分の直覺をとにか  
く頼たのもしくまた嬉うれしく思っている。人間を愛し得うる  
人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懐ふところ  
に入いろうとするものを、手をひろげて抱き締める事  
のできない人、——これが先生であつた。

今いった通り先生は始終静かであつた。落ち付い  
ていた。けれども時として変な曇りがその顔を横切

る事があつた。窓に黒い鳥影が射<sup>さ</sup>すように。射すか  
と思うと、すぐ消えるには消えたが。私が始めてそ  
の曇りを先生の眉間<sup>みけん</sup>に認めたのは、雑司<sup>ぞうしがや</sup>ヶ谷の墓地  
で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私はその  
異様の瞬間に、今まで快く流れていた心臓の潮流を  
ちよつと鈍らせた。しかしそれは単に一時の結滞<sup>けつたい</sup>に  
過ぎなかつた。私の心は五分と経<sup>た</sup>たないうちに平素  
の弾力を回復した。私はそれぎり暗そうなこの雲の

影を忘れてしまった。ゆくりなくまたそれを思い出させられたのは、小春こはるの尽きるに間まのない或ある晩の事であつた。

先生と話していた私は、ふと先生がわざわざ注意してくれた銀杏いちじょうの大樹たいじゆを眼めの前に想おもい浮かべた。勘定してみると、先生が毎月例まいげつれいとして墓参に行く日が、それからちょうど三日目に当っていた。その三日目は私の課業ひるが午おで終える楽な日であつた。私は先生

に向かつてこういった。

「先生そうし雑司がやヶ谷の銀杏はもう散ってしまつたでしようか」

「まだ空坊主からぼうずにはならないでしょう」

先生はそう答えながら私の顔を見守つた。そうしてそこからしばし眼を離さなかつた。私はすぐいった。

「今度お墓参りはかまいにいらつしやる時にお伴ともをしても宜よ



ござんすか。私は先生といっしよにあすこいらが散歩してみたい」

「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

「しかしついでに散歩をなすつたらちようど好いじゃありませんか」

先生は何とも答えなかった。しばらくしてから、「私のは本当の墓参りだけなんだから」といって、

どこまでも墓参ぼさんと散歩を切り離そうとする風ふうに見えた。私と行きたくない口実だか何だか、私にはその時の先生が、いかにも子供らしくて変に思われた。私はなおと先へ出る気になった。

「じゃお墓参りでも好いからいっしょに伴つれて行つて下さい。私もお墓参りをしますから」

実際私には墓参と散歩との区別がほとんど無意味のように思われたのである。すると先生の眉まゆがちよ

つと曇った。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌悪とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであった。私は忽ち雑司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思い起した。二つの表情は全く同じだったのである。

「私は」と先生がいった。「私はあなたに話す事のできないある理由があつて、他といつしよにあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さえま

だ伴れて行つた事がないのです」

## 七

わたくし

私は不思議に思つた。しかし私は先生を研究する

気でその宅へ出入りをするのではなかつた。私はた

だそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の

私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきもの

の一つであつた。私は全くそのために先生と人間ら

しい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇

心が幾分でも先生の心に向かつて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊<sup>たつと</sup>いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとして、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。  
まなこ

る。

私は月に二度もしくは三度ずつ必ず先生の宅<sup>うち</sup>へ行くようになった。私の足が段々繁<sup>しげ</sup>くなった時のある日、先生は突然私に向かつて聞いた。

「あなたは何でそうたびたび私のようなものの宅へやって来るのですか」

「何でといって、そんな特別な意味はありません。

——しかしお邪魔<sup>じやま</sup>なんですか」

「邪魔だとはいいません」

なるほど迷惑という様子は、先生のどこにも見えなかった。私は先生の交際の範囲の極めて狭い事きわを知っていた。先生の元の同級生などで、その頃東京ころにいるものはほとんど二人か三人しかないという事も知っていた。先生と同郷の学生などには時たま座敷で同座する場合もあったが、彼らのいずれもは皆みんなな私ほど先生に親しみをもっていないように見受け

られた。

「私は淋<sup>さび</sup>しい人間です」と先生がいった。「だからあなたの来て下さる事を喜んでいます。だからなぜそうたびたび来るのかといつて聞いたのです」

「そりやまたなぜです」

私がこう聞き返した時、先生は何とも答えなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾<sup>いくつ</sup>歳ですか」といった。



この問答は私にとってすこぶる不得要領ふとくようりょうのもので

あつたが、私はその時底そこまで押さずに帰ってしまつ

た。しかもそれから四日と経たたないうちにまた先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否いなや笑い出した。

「また来ましたね」といった。

「ええ来ました」といって自分も笑つた。

私は外ほかの人からこういわれたらきつと癢しやくに触さわつた

ろうと思う。しかし先生にこういわれた時は、まる

で反対であつた。癩に触らないばかりでなくかえつて愉快だつた。

「私は淋<sup>さび</sup>しい人間です」と先生はその晩またこの間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、これによるとあなたも淋しい人間じゃないですか。私は淋しくつても年を取っているから、動かずにいられるが、若いあなたはそうは行かないのでしよう。動けるだけ動きたいのでしよう。動いて何かに打<sup>ぶ</sup>つ

かりたいのでしょう……」

「私はちつとも淋さむしくはありません」

「若いうちほど淋さむしいものはありません。そんならなぜあなたはそうたびたび私の宅うちへ来るのですか」

ここでもこの間の言葉がまた先生の口から繰り返された。

「あなたは私に会ってもおそらくまだ淋さびしい気がどこかでしているでしょう。私にはあなたのためにそ

の淋しさを根元ねもとから引き抜いて上げるだけの力がな  
いんだから。あなたは外ほかの方を向いて今に手を広げ  
なければならなくなります。今に私の宅の方へは足  
が向かなくなります」

先生はこういつて淋しい笑い方をした。

## 八

幸さいわいにして先生の予言は実現されずに済んだ。経  
験わたくしのない当時の私は、この予言の中うちに含まれている

明白な意義さえ了解し得なかった。私は依然として先生に会いに行つた。その内うちいつの間にか先生の食卓で飯めしを食うようになった。自然の結果奥さんとも口を利きかなければならないようになった。

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の今まで経過して来た境遇からいって、私はほとんど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因げんいんかどうかは疑問だが、

私の興味は往来で出合う知りもしない女に向かつて多く働くだけであつた。先生の奥さんにはその前玄関で会つた時、美しいという印象を受けた。それから会うたんびに同じ印象を受けない事はなかつた。しかしそれ以外に私はこれといつてとくに奥さんについて語るべき何物ももたないような気がした。

これは奥さんに特色がないというよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正当かも

知れない。しかし私はいつでも先生に付属した一部分のような心持で奥さんに対していた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからという好意で、私を遇していたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになっていた。それで始めて知り合いになった時の奥さんについては、ただ美しいという外ほかに何の感じも残っていない。

ある時私は先生の宅うちで酒を飲まされた。その時奥

さんが出て来て傍そばで酌しやくをしてくれた。先生はいつもより愉快そうに見えた。奥さんに「お前も一つお上がり」といって、自分の呑のみ干のした盃さかずきを差した。奥さんは「私は……」と辞退しかけた後あと、迷惑そうにそれを受け取った。奥さんは綺麗きれいな眉まゆを寄せて、私の半分ばかり注ついで上げた盃を、唇の先へ持って行った。奥さんと先生の間しもに下しものような会話が始まった。



「珍しい事。私に吞めとおっしやった事は滅多に  
ないのにね」

「お前は嫌いだからさ。しかし稀には飲むといいよ。  
好い心持になるよ」

「ちつともならないわ。苦しいぎりで。でもあなたは  
大変ご愉快そうね、少しご酒を召し上がると」

「時によると大変愉快になる。しかしいつでもとい  
うわけにはいかない」

「今夜はいかがです」

「今夜は好いい心持だね」

「これから毎晩少しずつ召し上がると宜よござんすよ」

「そうはいかない」

「召し上がって下さいよ。その方が淋さむしくなくって好いいから」

先生の宅うちは夫婦と下女げじょだけであつた。行くたびに

大抵はひそりとしていた。高い笑い声などの聞こえていた。  
る試しはまるでなかった。或る時は宅の中にいるものは先生と私だけのよう気がした。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を向いていった。私は「そうですね」と答えた。

しかし私の心には何の同情も起らなかった。子供を持った事のないその時の私は、子供をただ蒼蠅うるさいもののように考えていた。

「二人貰<sup>もら</sup>ってやろうか」と先生がいった。

「貰<sup>もら</sup>ッ子じゃ、ねえあなた」と奥さんはまた私の方を向いた。

「子供はいつまで経<sup>た</sup>ったってできっこないよ」と先生がいった。

奥さんは黙っていた。「なぜです」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」といって高く笑った。

## 九

わたくし

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の

いつつい

一対であつた。家庭の一員として暮した事のない私

のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども

わか

も、座敷で私と対坐たいざしている時、先生は何かのついでに、

げじょ

下女を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。

（奥さんの名は静しずといった）。先生は「おい静」と

ふすま

いつでも襖ふすまの方を振り向いた。その呼びかたが私に

は優やさしく聞こえた。返事をして出て来る奥さんの様

子も甚はなはだ素直であつた。ときたまご馳走ちそうになつて、

奥さんが席へ現われる場合などには、この関係が一層明らかあいだに二人の間に描えがき出されるようであつた。

先生は時々奥さんを伴つれて、音楽会だの芝居だのに行つた。それから夫婦づれで一週間以内の旅行をした事も、私の記憶によると、二、三度以上あつた。

私は箱根はこねから貰つた絵端書えはがきをまだ持っている。日光にっこう

へ行つた時は紅葉もみじの葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

当時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまずこんなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私がいつもの通り、先生の玄関から案内を頼もうとすると、座敷の方でだれかの話し声がした。よく聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆いさかいらしかつた。先生の宅は玄関の次

がすぐ座敷になつていたので、格子こうしの前に立ってい

た私の耳にその言逆いさかいの調子だけはほぼ分つた。そ

うしてそのうちの一人が先生だという事も、時々高

まつて来る男の方の声で解つた。相手は先生よりも

低い音おんなので、誰だか判然はつきりしなかつたが、どうも奥

さんらしく感ぜられた。泣いているようでもあつた。

私はどうしたものだろうと思つて玄関先で迷つたが、  
すぐ決心をしてそのまま下宿へ歸つた。



妙に不安な心持が私を襲って来た。私は書物を読んでも呑み込む能力を失ってしまった。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようといつて、下から私を誘った。先刻帯の間へ包んだままの時計を出して見ると、もう八時過ぎであつた。私は帰つたなりまだ袴はかまを着けていた。私はそれなりすぐ表へ出た。

その晩私は先生といっしよに麦酒ビールを飲んだ。先生は元来酒量に乏しい人であつた。ある程度まで飲んで、それで酔えなければ、酔うまで飲んでみるという冒険のできない人であつた。

「今日は駄目だめです」といつて先生は苦笑した。

「愉快になれませんか」と私は氣の毒そうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻さつきの事が引ひつ懸かつていた。

さかな

肴の骨が咽喉のどに刺さった時のように、私は苦しんだ。打ち明けてみようかと考えたり、止よした方が好よからうかと思い直したりする動揺が、妙に私の様子をそわそわさせた。

「君、今夜はどうかしていますね」と先生の方からいい出した。「実は私も少し変なのですよ。君に分りますか」

私は何の答えもし得なかった。

「実は先刻妻と少し喧嘩けんかをしてね。それで下くだらない  
神経を昂奮こうふんさせてしまつたんです」と先生がまたい  
つた。

「どうして……」

私には喧嘩という言葉が口へ出て来なかつた。

「妻が私を誤解するのです。それを誤解だといって  
聞かせても承知しないのです。つい腹を立てたの  
です」

「どんなに先生を誤解なさるんですか」

先生は私のこの問いに答えようとはしなかった。

「妻が考えているような人間なら、私だってこんなに苦しんでいやしない」

先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であつた。

## 十

二人が帰るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁も

ちよう

つづいた。その後で突然先生が口を利き出した。

「悪い事をした。怒って出たから妻はさぞ心配をしているだろう。考えると女は可哀かわいそうなものですね。  
私わたくしの妻などは私より外ほかにまるで頼りにするものがないんだから」

先生の言葉はちよつとそこで途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐその続きへ移つて行つた。

「そういうと、夫の方はいかにも心丈夫のようであり滑稽だが。君、私は君の眼にどう映りますかね。」

強い人に見えますか、弱い人に見えますか」

ちゅうぐらい

「中位に見えます」と私は答えた。この答えは先生にとって少し案外らしかった。先生はまた口を閉じて、無言で歩き出した。

うち

そば

先生の宅へ帰るには私の下宿のつい傍を通るのが順路であった。私はそこまで来て、曲り角で分れる

のが先生に済まないような気がした。「ついでにお宅の前までお伴ともしようか」といった。先生は忽たちまち手で私を遮さえぎった。

「もう遅いから早く帰りたまえ。私も早く帰ってやるんだから、妻君さいくんのために」

先生が最後に付け加えた「妻君のために」という言葉は妙にその時の私の心を暖かにした。私はその言葉のために、帰ってから安心して寝る事ができた。



私はその後ごも長い間この「妻君のために」という言葉  
を忘れなかった。

先生と奥さんの間に起った波瀾はらんが、大したもので  
ない事はこれでも解わかった。それがまた滅多めったに起る現  
象でなかった事も、その後絶えず出入でいりをして来た  
私にはほぼ推察ができた。それどころか先生はある  
時こんな感想すら私に洩もらした。

「私は世の中で女というものをたった一人しか知ら

ない。妻さい以外の女はほとんど女として私に訴えない  
のです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない  
男と思ってくれています。そういう意味からいって、  
私たちは最も幸福に生れた人間のいっつい一対であるべきは  
ずです」

私は今前後の行き掛ゆりを忘がれてしまったから、先  
生が何のためにこんな自白を私にして聞かせたの  
か、はっきり判然はつかりいう事ができない。けれども先生の態度の

真面目まじめであつたのと、調子の沈んでいたのとは、い

まだに記憶に残っている。その時ただ私の耳に異様に響いたのは、「最も幸福に生れた人間の一对であるべきはずです」という最後の一句であつた。先生はなぜ幸福な人間といい切らないで、あるべきはずであると断わつたのか。私にはそれだけが不審であつた。ことにそこへ一種の力を入れた先生の語気が不審であつた。先生は事實はたして幸福なのだろう

か、また幸福であるべきはずでありながら、それほど幸福でないのだろうか。私は心の中で疑<sup>うち</sup>らざる<sup>うたぐ</sup>を得なかつた。けれどもその疑いは一時限りどこかへ葬<sup>ほうむ</sup>られてしまった。

私はそのうち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向<sup>さむか</sup>いで話をする機会に出合つた。先生はその日よこはま<sup>よこはま</sup> しゅっぱん<sup>しゅっぱん</sup>横浜を出帆する汽船に乗つて外国へ行くべき友人を新橋<sup>しんばし</sup>へ送りに行つて留守であつた。横浜から船に乗

る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのはその頃ころの習慣であつた。私はある書物について先生に話してもらふ必要があつたので、あらかじめ先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行きは前日わざわざ告別に來た友人に対する礼義れいぎとしてその日突然起つた出来事であつた。先生はすぐ歸るから留守でも私に待っているようにといい残して行つた。それで私は座敷へ上がつて、先生を待つ間、

奥さんと話をした。

## 十一

その時の私はわたくしすでに大学生であつた。始めて先生の宅うちへ来た頃ころから見るとずっと成人した氣でいた。

奥さんとも大分懇意だいふになつた後のちであつた。私は奥さんに対して何の窮屈も感じなかつた。差向さしむかいで色々話をした。しかしそれは特色のないただの談話だから、今ではまるで忘れてしまった。そのうちでた

った一つ私の耳に留まったものがある。しかしそれを話す前に、ちよつと断つておきたい事がある。

先生は大学出身であつた。これは始めから私に知れていた。しかし先生の何もしないで遊んでいるという事は、東京へ歸つて少し経<sup>た</sup>つてから始めて分つた。私はその時どうして遊んでいられるのかと思つた。

先生はまるで世間に名前を知られていない人であ

った。だから先生の学問や思想については、先生と  
みっせつ

密切の關係をもっている私より外に敬意を払うもの  
ほか

のあるべきはずがなかった。それを私は常に惜しい  
お

事だといった。先生はまた「私のようなものが世の

中へ出て、口を利きいては濟まない」と答えるぎりで、

取り合わなかった。私にはその答えが謙遜過けんそんぎてか

えって世間を冷評するようにも聞こえた。実際先生

は時々昔の同級生で今著名になっている誰彼だれかれを捉とらえ



て、ひどく無遠慮な批評を加える事があつた。それで私は露骨にその矛盾を挙げて云々してみた。うんぬん私の精神は反抗の意味というよりも、世間が先生を知らないで平気でいるのが残念だったからである。その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向かつて働き掛ける資格のない男だから仕方ありません」といった。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だ

か、悲哀だか、解<sup>わか</sup>らなかつたけれども、何しろ二の句の継げないほどに強いものだったので、私はそれぎり何もいう勇気が出なかつた。

私が奥さんと話している間に、問題が自然先生のことからそこへ落ちて来た。

「先生はなぜああやって、宅で考えたり勉強したりなさるだけで、世の中へ出て仕事をなさらないんでしょう」

「あの人は駄目だめですよ。そういう事が嫌いなんですから」

「つまり下くだらない事だと悟さとっていらっしやるんでしょうか」

「悟るの悟らないのって、——そりゃ女だからわたくしには解りませんけれど、おそろくそんな意味じゃないでしょう。やっぱり何かやりたいのでしょう。それでいてできないんです。だから気の毒で

すわ」

「しかし先生は健康からいって、別にどこも悪いところはないようじゃありませんか」

「丈夫ですとも。何にも持病はありません」

「それでなぜ活動ができないんでしょう」

「それが解<sup>わか</sup>らないのよ、あなた。それが解るくらいなら私だって、こんなに心配しやしません。わからないから気の毒でたまらないんです」

奥さんの語気には非常に同情があつた。それでも口元だけには微笑が見えた。外側からいえば、私の方がむしろ真面目まじめだった。私はむずかしい顔をして黙っていた。すると奥さんが急に思い出したようにまた口を開いた。

「若い時はあんな人じゃなかったんですよ。若い時はまるで違っていました。それが全く変ってしまつたんです」

「若い時っていつ頃ですか」と私が聞いた。

「書生時代よ」

「書生時代から先生を知っていらっしゃったんですか」

奥さんは急に薄赤い顔をした。

## 十二

奥さんは東京の人であつた。それはかつて先生からも奥さん自身からも聞いて知っていた。奥さんは

「本当いあいと合この子なんですよ」といった。奥さん

の父親はたしか鳥取かどこかの出であるのに、お母

さんの方はまだ江戸といった時分じぶんの市ヶ谷いちがやで生れた

女なので、奥さんは冗談半分そういったのである。

ところが先生は全く方角違いの新潟県人にいがたであつた。

だから奥さんがもし先生の書生時代を知っていると

すれば、郷里の関係からでない事は明らかであつた。

しかし薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話を

したくないようだったので、私の方でも深くは聞かずにおいた。

先生と知り合いになってから先生の亡くなるまでに、私はずいぶん色々の問題で先生の思想や情操に触れてみたが、結婚当時の状況については、ほとんど何ものも聞き得なかった。私は時によると、それを善意に解釈してもみた。年輩の先生の事だから、なま艶めかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざ



と慎<sup>つつし</sup>んでいるのだらうと思った。時によると、またそれを悪くも取った。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうち、に成人したために、そういう艶<sup>つや</sup>っぽい問題になると、正直に自分を開放するだけの勇氣がないのだらうと考へた。もつともどちらにも推測に過ぎなかつた。そうしてどちらの推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たわる花やかなロマンスの存在を仮定していた。

私の仮定ははたして誤らなかつた。けれども私はただ恋の半面だけを想像に描き得たに過ぎなかつた。えが先生は美しい恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに先生にとって見惨みじめなものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、まず自分の生命を破壊してしま

った。

私は今この悲劇について何事も語らない。その悲劇のためにむしろ生れ出たともいえる二人の恋愛について、先刻<sup>さつき</sup>いった通りであつた。二人とも私にはほとんど何も話してくれなかつた。奥さんは慎みのために、先生はまたそれ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残っている事がある。或<sup>あ</sup>る時

はなじぶん

花時分に私は先生といっしょに上野<sup>うえの</sup>へ行つた。そう

してそこで美しい一対<sup>いっつい</sup>の男女<sup>なんによ</sup>を見た。彼らは睦<sup>むつ</sup>まじ

そうに寄り添つて花の下を歩いていた。場所が場所

なので、花よりもそちらを向いて眼を峙<sup>そば</sup>だてている

人が沢山あつた。

「新婚の夫婦のようだね」と先生がいった。

「仲<sup>よ</sup>が好さそうですね」と私が答えた。

先生は苦笑さえしなかつた。二人の男女を視線の

外ほかに置くような方角へ足を向けた。それから私にこ  
う聞いた。

「君は恋をした事がありますか」  
私はないと答えた。

「恋をしたくはありませんか」  
私は答えなかった。

「したくない事はないでしょう」  
「ええ」

「君は今あの男と女を見て、冷評ひやかしましたね。あの

冷評ひやかのうちには君が恋を求めながら相手を得られな

いという不快の聲が交まじっていきましょう」

「そんな風ふうに聞こえましたか」

「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもつと暖かい声を出すものです。しかし……しかし君、恋は罪悪ですよ。解わかっていますか」

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかった。

### 十三

我々は群集の中にいた。群集はいずれも嬉しうれそう  
な顔をしていた。そこを通り抜けて、花も人も見え  
ない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機  
会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私わたくしがその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は  
前と同じように強かった。

「なぜですか」

「なぜだか今に解ります。今にじゃない、もう解っているはずですよ。あなたの心はとつくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれどもそこは案外に空虚であつた。思いあたるようなものは何にもなかった。

「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません」



ん。私は先生に何も隠してはいないつもりです」

「目的物が無いから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」

「今それほど動いちやいません」

「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。しかしそれは恋とは違います」

「恋に上るのぼ階段かいだんなんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を異ことにしているように思われます」

「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、なおさらあなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際お気の毒に思つて

います。あなたが私からよそへ動いて行くのは仕方がない。私はむしろそれを希望しているのです。しかし……」

私は変に悲しくなった。

「私が先生から離れて行くようにお願いになれば仕方がありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「しかし気を付けないといけない。恋は罪惡なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もな  
いが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知  
っていますか」

私は想像で知っていた。しかし事実としては知ら  
なかった。いずれにしても先生のいう罪惡という意  
味は朦朧もうろうとしてよく解わからなかった。その上私は少し  
不愉快になった。

「先生、罪惡という意味をもつと判然はつきりいつて聞かして下さい。それでなければこの問題をここで切り上げて下さい。私自身に罪惡という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実まことを話している気でいた。ところが実際は、あなたを焦慮じらしていたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から鶯溪うぐいすだにの方角に静かな

歩調で歩いて行つた。垣の隙間すきまから広い庭の一部に  
茂る熊笹くまざさが幽邃ゆうすいに見えた。

「君は私がなぜ毎月雑誌まいげつ司ケ谷そうしがやの墓地に埋うまっている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問いは全く突然であつた。しかも先生は私がこの問いに対して答えられないという事もよく承知していた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は始めて気が付いたようにこういつた。

「また悪い事をいった。焦慮<sup>じら</sup>せるのが悪いと思って、説明しようとする、その説明がまたあなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止め<sup>や</sup>みましょう。とにかく恋は罪惡ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

私には先生の話がますます解<sup>わか</sup>らなくなつた。しかし先生はそれぎり恋を口にしなかつた。

年の若い私はわたくしややともすると一図いちずになりやすかつ

た。少なくとも先生の眼にはそう映っていたらしい。

私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なものであった。教授の意見よりも先生のお思想の方が有難いのであった。とどの詰まりをいえば、教壇に立つて私を指導してくれる偉い人々よりもただ独りひとを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであった。



「あんまり逆上のぼせちゃいけません」と先生がいった。

「覚さめた結果としてそう思うんです」と答えた時の私には充分の自信があつた。その自信を先生は肯うけがってくれなかつた。

「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたからそれほどに思われるのを、苦しく感じています。しかしこれから先のあなたに起るべき変化を予想して見ると、なお

苦しくなります」

「私はそれほど軽薄に思われているんですか。それほど不信用なんですか」

「私はお気の毒に思うのです」

「気の毒だが信用されないとおっしゃるんですか」

先生は迷惑そうに庭の方を向いた。その庭に、この間まで重そうな赤い強い色をぽたぽた点じていた椿つばきの花はもう一つも見えなかった。先生は座敷から

この椿の花をよく眺<sup>なが</sup>める癖があつた。

「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

その時生垣<sup>いけがき</sup>の向うで金魚売りらしい声がした。そ

の外<sup>ほか</sup>には何の聞こえるものもなかった。大通りから

二丁<sup>ちよう</sup>も深く折れ込んだ小路<sup>こうじ</sup>は存外<sup>ぞんがい</sup>静かであつた。家<sup>うち</sup>

の中はいつもの通りひっそりしていた。私は次の間<sup>ま</sup>

に奥さんのいる事を知っていた。黙って針仕事か何

かしている奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。しかし私は全くそれを忘れてしまった。

「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答えを避けた。

「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自

分で自分が信用できないから、人も信用できないようになっているのです。自分を呪うより外ほかに仕方がないのです」

「そうむずかしく考えれば、誰だつて確かなものはないでしょう」

「いや考えたんじゃない。やったんです。やった後で驚いたんです。そうして非常に怖こわくなつたんです」

私はもう少し先まで同じ道を辿たどって行きたかった。

すると襖ふすまの陰で「あなた、あなた」という奥さんの

声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「ちよつと」と先生を次の間まへ呼んだ。二人の間にどんな用事が起ったのか、私には解わからなかった。それを想像する余裕を与えないほど早く先生はまた座敷へ歸つて来た。

「とにかくあまり私を信用してはいけませんよ。今

に後悔するから。そうして自分が欺あざむかれた返報に、残酷な復讐ふくしゅうをするようになるものだから」

「そりやどういう意味ですか」

「かつてはその人の膝ひざの前に跪ひざまずいたという記憶が、

今度はその人の頭の上に足を載のせさせようとするの

です。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬

を斥しりぞけたいと思うのです。私は今より一層淋さびしい未

来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢した

いのです。自由と独立と己おのれとに充みちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないでしょう」

私はこういう覚悟をもっている先生に対して、いすべき言葉を知らなかった。

## 十五

その後私は奥おわたくしさんの顔を見るたびに気になった。

先生は奥さんに対して、も始終こういう態度に出るの



だろうか。もしそうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだろうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めようがなかった。私はそれほど近く奥さんに接触する機会がなかったから。それから奥さんは私に会うたびに尋常であつたから。最後に先生のいる席でなければ私と奥さんとは滅多に顔めったを合せなかつたから。

私の疑惑はまだその上にもあつた。先生の人間に

對するこの覺悟はどこから来るのだろうか。ただ冷たい眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだろうか。先生は坐すわつて考える質たちの人であつた。先生の頭さえあれば、こういう態度は坐つて世の中を考えていても自然と出て来るものだろうか。

私にはそうばかりとは思えなかつた。先生の覺悟は生きた覺悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋せきぞうの輪廓りんかくとは違つていた。私の眼に映ずる先

生はたしかに思想家であつた。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれて<sup>ま</sup>いるらしかった。自分と切り離された他人の事実でなくつて、自分自身が痛切に味わつた事実、血が熱くなつたり脈が止まつたりするほどの事実が、畳み込まれているらしかった。

これは私の胸で推測するがものはない。先生自身すでにそうだと告白していた。ただその告白が雲の

峯のようであつた。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。そうしてなぜそれが恐ろしいか私にも解らなかつた。告白はぼうとしていた。それでいて明らかに私の神経を震わせた。

私は先生のこの人生観の基点に、或る強烈な恋愛事件を仮定してみた。（無論先生と奥さんとの間に起つた）。先生がかつて恋は罪惡だといった事から照らし合せて見ると、多少それが手掛りにもなつた。

しかし先生は現に奥さんを愛していると私に告げた。  
すると二人の恋からこんな厭世えんせいに近い覚悟が出よう  
はずがなかった。「かつてはその人の前に跪ひざまずいたと  
いう記憶が、今度はその人の頭の上に足を載のせさせ  
ようとする」といった先生の言葉は、現代一般の  
誰彼たれかれについて用いられるべきで、先生と奥さんの間  
には当てはまらないもののもうでもあった。

雑司ぞうしがやヶ谷にある誰だれだか分らない人の墓、——これ

も私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い縁故のある墓だという事を知っていた。先生の生活に近づきつつありながら、近づく事のできない私は、

先生の頭の中にある生命いのちの断片として、その墓を私

の頭の中にも受け入れた。けれども私に取ってその

墓は全く死んだものであった。二人の間にある生命いのち

の扉を開ける鍵かぎにはならなかった。むしろ二人の間

に立って、自由の往来を妨げる魔物のようであった。

そうこうしているうちに、私はまた奥さんと差し向いで話をしなければならぬ時機が来た。その頃は日の詰つまって行くせわしない秋に、誰も注意を惹ひか  
れる肌寒はださむの季節であつた。先生の附近ふきんで盗難に罹かつ  
たものが三、四日続いて出た。盗難はいずれも宵の  
口であつた。大したものを持って行かれた家うちはほと  
んどなかったけれども、はいられた所では必ず何か

取られた。奥さんは気味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空<sup>あ</sup>けなければならぬ事情ができてきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職しているものが上京したため、先生は外<sup>ほか</sup>の二、三名と共に、ある所でその友人に飯<sup>めし</sup>を食わせなければならなくなつた。先生は訳を話して、私に帰ってくる間までの留守番を頼んだ。私はすぐ引き受けた。



わたくし

私の行ったのはまだ灯ひの点くか点かない暮れ方で

あつたが、几帳面きちょうめんな先生はもう宅うちにいなかった。

「時間に後おくれると悪いって、つい今しがた出掛けま

した」といった奥さんは、私を先生の書齋へ案内した。

書齋には洋机テーブルと椅子いすの外ほかに、沢山の書物が美しい

背皮せがわを並べて、硝子ガラス越しに電燈でんとうの光で照らされていた。

奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲団ざぶとんの上へ私を坐すわらせ

て、「ちつとそこいらにある本でも読んでいて下さい」と断つて出て行つた。私はちようと主人の歸りを待ち受ける客のような気がして済まなかつた。私は畏<sup>かしこ</sup>まつたまま烟草<sup>タバコ</sup>を飲んでいた。奥さんが茶の間で何か下女<sup>げじょ</sup>に話している声が聞こえた。書齋は茶の間の縁側を突き当つて折れ曲つた角<sup>かど</sup>にあるので、棟<sup>むね</sup>の位置からいうと、座敷よりもかえつて掛け離れた静かさを領<sup>りょう</sup>していた。ひとしきりで奥さんの話し声

が已<sup>や</sup>むと、後<sup>あと</sup>はしんとした。私は泥棒を待ち受ける  
ような心持で、凝<sup>じつ</sup>としながら気をどこかに配った。

三十分ほどすると、奥さんがまた書斎の入口へ顔  
を出した。「おや」といって、軽く驚いた時の眼を  
私に向けた。そうして客に来た人のように鹿爪<sup>しかづめ</sup>らし  
く控えている私をおかしそうに見た。

「それじゃ窮屈でしょう」

「いえ、窮屈じゃありません」

「でも退屈でしょう」

「いいえ。泥棒が来るかと思つて緊張しているから退屈でもありません」

奥さんは手に紅茶茶碗こうちやぢやわんを持ったまま、笑いながら

そこに立っていた。

「ここは隅っこだから番をするには好よくありませんね」と私がいった。

「じゃ失礼ですがもつと真中へ出て来て頂戴。ちやうだい。ご

たいくつ

退屈だろうと思つて、お茶を入れて持つて来たんで

すが、茶の間で宜よろしければあちらで上げますから」

私は奥さんの後あとに尾ついて書齋を出た。茶の間には

綺麗きれいなな長火鉢ながひばちに鉄瓶てつびんが鳴なっていた。私はそこで茶と

菓子ちそうのご馳走ちそうになった。奥さんは寝ねられないといけ

ないといつて、茶碗に手を触れなかった。

「先生はやつぱり時々こんな会へお出掛でかけになるん

ですか」

「いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段々人の顔を見るのが嫌いになるようです」

こういった奥さんの様子に、別段困ったものだという風も見えなかつたので、私はつい大胆になった。

「それじゃ奥さんだけが例外なんですか」

「いいえ私も嫌われている一人なんです」

「そりや嘘です」と私がいった。「奥さん自身嘘と

知りながらそうおっしゃるんでしょう」

「なぜ」

「私にいわせると、奥さんが好きになったから世間が嫌いになるんですもの」

「あなたは学問をする方<sup>かた</sup>だけあつて、なかなかお上手<sup>じょうず</sup>ね。空<sup>から</sup>っぽな理屈を使いこなす事が。世の中が嫌いになったから、私までも嫌いになったんだともいわれるじゃありませんか。それと<sup>おん</sup>なじ理屈で」

「両方ともいわれる事はいわれますが、この場合は私の方が正しいのです」

「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空からさかずきの盃でよくああ飽きずに献酬けんしゅうができると思いますわ」

奥さんの言葉は少し手痛てひどかった。しかしその言葉の耳障みみざわりからいうと、決して猛烈なものではなかった。自分に頭脳のある事を相手に認めさせて、そこに一



種の誇りを見出すほどに奥さんは現代的でなかった。みいだ  
奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事に  
しているらしく見えた。

## 十七

私はまだその後わたくしにいうべき事をもっていた。あとけれ  
ども奥さんから徒らいたずに議論を仕掛ける男のように取  
られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干し  
た紅茶茶碗こうちやぢやわんの底を覗のぞいて黙っている私を外そらさない

ように、「もう一杯上げましょうか」と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

「いくつ？　一つ？　二ツつ？」

妙なもので角砂糖をつまみ上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の数かずを聞いた。奥さんの態度は私に媚こびるというほどではなかったけれども、先刻さつきの強い言葉を力つとめて打ち消そうとする愛嬌あいきょうに充みちていた。

私は黙って茶を飲んだ。飲んでしまっても黙っていた。

「あなた大変黙り込んじゃったのね」と奥さんがいった。

「何かいうとまた議論を仕掛けるなんて、叱り付けられそうですから」と私は答えた。

「まさか」と奥さんが再びいった。

二人はそれを緒口いとくちにまた話を始めた。そうしてま

た二人に共通な興味のある先生を問題にした。

「奥さん、先刻さつきの続きをもう少しわけて下さいま

せんか。奥さんには空からな理屈と聞こえるかも知れま

せんが、私はそんな上うわの空そらでいつてる事じゃないん

だから」

「じゃおっしやい」

「今奥さんが急にいなくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きていられるでしょうか」

「そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外ほかに仕方がないじゃありませんか。私の所へ持つて来る問題じゃないわ」

「奥さん、私は真面目まじめですよ。だから逃げちゃいけません。正直に答えなくっちゃ」

「正直よ。正直にいつて私には分らないのよ」

「じゃ奥さんは先生をどのくらい愛していらっしやるんですか。これは先生に聞くよりむしろ奥さんに

伺っていい質問ですから、あなたに伺います」

「何もそんな事を開き直って聞かなくつても好い  
じゃありませんか」

「真面目くさつて聞くがものはない。分り切つて  
とおっしゃるんですか」

「まあそうよ」

「そのくらい先生に忠実なあなたが急にいなくなつ  
たら、先生はどうなるんでしょう。世の中のどっち

を向いても面白そうでない先生は、あなたが急にいなくなったら後でどうなるでしょう。先生から見てじゃない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでしょうか、不幸になるでしょうか」

「そりや私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）。先生は私を離れれば不幸になるだけです。あるいは生きていられな

いかも知れませんよ。そういうと、己惚おのぼれになるよう

ですが、私は今先生を人間としてできるだけ幸福に  
しているんだと信じていますわ。どんな人があつて  
も私ほど先生を幸福にできるものはないとまで思い  
込んでいますわ。それだからこうして落ち付いてい  
られるんです」

「その信念が先生の心に好よく映るはずだと私は思い  
ます」



「それは別問題ですわ」

「やっぱり先生から嫌われているとおっしやるんですか」

「私は嫌われてるとは思いません。嫌われる訳がないんですもの。しかし先生は世間が嫌いなんですよ。世間というより近頃では人間が嫌いになつていくんですよ。ちかごろ だからその人間の一人として、いちにん 私も好かれるはずがないじゃありませんか」

奥さんの嫌われているという意味がやっと私に呑  
み込めた。

## 十八

わたくし私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が  
旧式の日本の女らしくないところも私の注意に一種  
の刺戟しげきを与えた。それで奥さんはその頃流行ころはやり始め  
たいわゆる新しい言葉などはほとんど使わなかった。

私は女というものに深い交際つきあいをした経験のない

迂闊うかつな青年であつた。男としての私は、異性に対す

る本能から、憧憬どうけいの目的物として常に女を夢みてい

た。けれどもそれは懐かしい春の雲を眺ながめるような

心持で、ただ漠然ぼくぜんと夢みていたに過ぎなかつた。だ

から実際の女の前へ出ると、私の感情が突然変る事

が時々あつた。私は自分の前に現われた女のために

引き付けられる代りに、その場に臨んでかえつて変

はんぱつりよく

な反撥力を感じた。奥さんに対した私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女の間に横たわる思想なんによの不公平という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私がこの前なぜ先生が世間的にもっと活動なさらないのであらうといって、あなたに聞いた時

に、あなたはおっしゃった事がありますね。元はあ  
あじやなかったんだって」

「ええいいました。実際あんなじやなかったんです  
もの」

「どんなだったんですか」

「あなたの希望なさるような、また私の希望するよ  
うな頼もしい人だったんです」

「それがどうして急に変化なすったんですか」

「急にじゃありません、段々あなつて来たのよ」

「奥さんはその間あいだ始終先生といっしよにいらしたんでしょう」

「無論いましたわ。夫婦ですもの」

「じゃ先生がそう変って行かれる原因げんいんがちゃんと解わかるべきはずですがね」

「それだから困るのよ。あなたからそういわれると  
実に辛いつらんですが、私にはどう考えても、考えよう

がないんですもの。私は今まで何遍なんべんあの人に、どうぞ打ち明けて下さいって頼んで見たか分りやしません」

「先生は何とおっしゃるんですか」

「何にもいう事はない、何にも心配する事はない、おれはこういう性質になったんだからというだけで、取り合ってくれないんです」

私は黙っていた。奥さんも言葉を途切とぎらした。

下女部屋にいる下女はことりとも音をさせなかった。私はまるで泥棒の事を忘れてしまった。

「あなたは私に責任があるんだと思ってやしませんか」と突然奥さんが聞いた。

「いいえ」と私が答えた。

「どうぞ隠さずにいって下さい。そう思われるのは身を切られるより辛いんだから」と奥さんがまたいった。「これでも私は先生のためにできるだけの事



はしているつもりなんです」

「そりや先生もそう認めていられるんだから、大丈夫です。ご安心なさい、私が保証します」

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注みずさしの水を鉄瓶てつびんに注さした。鉄瓶は忽たちまち鳴りを沈めた。

「私はとうとう辛防しんぼうし切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮なくいつて下さい、改められる欠点なら改めるからって、すると先

生は、お前に欠点なんかありやしない、欠点はおれの方にあるだけだということです。そういわれると、私悲しくなつて仕様がなぃんです、涙が出てなおい事自分の悪い所が聞きたくなるんです」

奥さんは眼の中に涙をいっぱい溜め<sup>うち</sup>た。

## 十九

始め<sup>わたくし</sup>私は理解のある女性<sup>によしやう</sup>として奥さんに対していた。私がその気で話しているうちに、奥さんの様子

が次第に変わって来た。奥さんは私の頭脳に訴える代りに、私の心臓ハートを動かし始めた。自分と夫の間には何の蟠わたかまりもない、またないはずであるのに、やはり何かある。それなのに眼を開あけて見極めようとすると、やはり何にもない。奥さんの苦にする要点はここにあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的えんせいてきだから、その結果として自分も嫌われているのだと断言

した。そう断言しておきながら、ちつともそこに落ち付いていられなかった。底を割ると、かえってその逆を考えていた。先生は自分を嫌う結果、とうとう世の中まで厭いやになったのだろうと推測していた。

けれどもどう骨を折っても、その推測を突き留めて事実とする事ができなかった。先生の態度はどこまでも良人おつとらしかった。親切で優しかった。疑いの塊かたまりをその日その日の情合じょうあいで包んで、そつと胸の奥に

しまっておいた奥さんは、その晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

「あなたどう思つて？」と聞いた。「私からあな  
つたのか、それともあなたのいう人世観じんせいかんとか何と  
かいうものから、ああなつたのか。隠さずいつて  
ちょうだい  
頂戴」

私は何も隠す気はなかった。けれども私の知らないあるものがそこに存在しているとすれば、私の答

えが何であろうと、それが奥さんを満足させるはずがなかった。そうして私はそこに私の知らないあるものがあると信じていた。

「私には解りわかません」

奥さんは予期の外はずれた時に見る憐あわれな表情をその咄とつ嗟に現わした。私はすぐ私の言葉を継ぎ足した。

「しかし先生が奥さんを嫌っていらつしやらない事だけは保証します。私は先生自身の口から聞いた通

りを奥さんに伝えるだけです。先生は嘘うそを吐つかない方かたでしよう」

奥さんは何とも答えなかった。しばらくしてからこういった。

「実は私すこし思いあたる事があるんですけれども……」

「先生がああいう風ふうになった原因げんいんについてですか」  
「ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任だけ

はなくなるんだから、それだけでも私大変楽になれるんですが、……」

「どんな事ですか」

奥さんはいい洩<sup>ひざ</sup>って膝の上に置いた自分の手を眺めていた。

「あなた判断して下すって。いうから」

「私にできる判断ならやります」

「みんなはいえないのよ。みんないうと叱<sup>しか</sup>られるか



ら。叱られないところだけよ」

私は緊張して唾液つばきを呑み込んだ。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲の好いお友達が一人あつたのよ。その方がかたちょうど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語ささやくような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であつた。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があつてから後<sup>のち</sup>なんです。先生の性質が段々變つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われない事もないのよ」

「その人の墓ですか、<sup>そうしがや</sup>雑司ヶ谷にあるのは」

「それもない事になってるからいいません。しかし人間は親友を一人亡くしただけで、そんなに変化できるものでしょうか。私はそれが知りたくって<sup>たま</sup>堪らないんです。だからそこを一つあなたに判断して頂きたいと思うの」

私の判断はむしろ否定の方に傾いていた。

## 二十

<sup>わたくし</sup>私は私のつらまえた事実の許す限り、奥さんを慰

めようとした。奥さんもまたできるだけ私によって  
慰められたそうに見えた。それで二人は同じ問題を  
いつまでも話し合った。けれども私はもとと事の  
大根を攫つかんでいなかった。奥さんの不安も実はそこ  
に漂ただよう薄い雲に似た疑惑から出て来ていた。事件の  
真相になると、奥さん自身にも多くは知れていなか  
った。知れているところでも悉すっかり皆は私に話す事がで  
きなかった。したがって慰める私も、慰められる奥

さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしていた。ゆらゆらしながら、奥さんはどこまでも手を出して、  
覚束おぼつかない私の判断に縋すがり付こうとした。

十時頃ごろになって先生の靴の音が玄関に聞こえた時、奥さんは急に今までのすべてを忘れたように、前に坐すわっている私をそっちのけにして立ち上がった。そうして格子こうしを開ける先生をほとんど出合であい頭がしらに迎えた。私は取り残されながら、後あとから奥さんに尾ついて

行つた。下女げじょだけは仮寝うたたねでもしていたとみえて、ついに出て来なかつた。

先生はむしろ機嫌がよかつた。しかし奥さんの調子はさらによかつた。今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜たまつた涙の光と、それから黒い眉毛まゆげの根に寄せられた八の字を記憶していた私は、その変化を異常なものとして注意深く眺ながめた。もしそれが詐いつわりでなかつたならば、（実際それは詐りとは思えなかつ

たが、今までの奥さんの訴えは感傷を玩ぶために  
センチメントもてあそ  
とくに私を相手に拵こしらえた、徒いたずらな女性の遊戯と取れ  
ない事もなかった。もつともその時の私には奥さん  
をそれほど批評的に見る気は起らなかった。私は奥  
さんの態度の急に輝いて来たのを見て、むしろ安心  
した。これならばそう心配する必要もなかったんだ  
と考え直した。

先生は笑いながら「どうもご苦労さま、泥棒は来

ませんでしたか」と私に聞いた。それから「来ない  
んで張合はりあいが抜けやしませんか」といった。

帰る時、奥さんは「どうもお気の毒さま」と会釈  
した。その調子は忙しいところを暇を潰つぶさせて気の  
毒だというよりも、せつかく来たのに泥棒がはいら  
なくって気の毒だという冗談さつきのように聞こえた。奥  
さんはそういいながら、先刻出した西洋菓子さつきの残り  
を、紙に包んで私の手に持たせた。私はそれを袂たもとへ



入れて、人通りの少ない夜寒よさむの小路こうじを曲折して賑にぎやかな町の方へ急いだ。

私はその晩の事を記憶のうちから抽ひき抜いてここへ詳くわしく書いた。これは書くだけの必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子もちを貰もらって帰るときの気分では、それほど当夜の会話を重く見ていなかった。私はその翌日午飯よくじつひるめしを食いに学校から帰ってきて、昨夜机ゆうべの上に載のせて置いた菓子の包み

を見ると、すぐその中からチョコレートを塗ったとびいろ  
鳶色のカステラを出して頬張った。ほおば  
そうしてそれを  
食う時に、必竟この菓子ひっきようを私にくれた二人の男女は、なんによ  
幸福な一対いっついとして世の中に存在しているのだと自覚  
しつつ味わった。

秋が暮れて冬が来るまで格別の事もなかった。私  
は先生の宅うちへ出ではいりをするついでに、衣服の洗あらい  
張はりや仕立したて方かたなどを奥さんに頼んだ。それまで

じゅばん  
繻絆

というものを着た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかったものを重ねるようになったのはこの時からであつた。子供のない奥さんは、そういう世話を焼くのがかえつて退屈たいくつ凌しのぎになつて、結句けっく身体からだの薬だぐらいの事をいつていた。

「こりや手て織おりね。こんな地じの好いい着物は今まで縫縫った事がないわ。その代り縫縫い悪にくいのよそりやあ。

まるで針が立たないんですもの。お蔭かげで針を二本折

りましたわ」

こんな苦情をいう時ですら、奥さんは別に面倒く  
さいという顔をしなかった。

## 二十一

冬が来た時、私は偶然国へ帰らなければならぬ  
事になった。私の母から受け取った手紙の中に、父  
の病気の経過が面白くない様子を書いて、今が今と  
いう心配もあるまいが、年が年だから、できるなら

都合して帰って来てくれと頼むように付け足してあった。

父はかねてから腎臓じんぞうを病んでいた。中年以後の人にしばしば見る通り、父のこの病は慢性やまいであつた。

その代り要心さえしていれば急変のないものと当人も家族のものも信じて疑わなかつた。現に父は養生のお蔭かげ一つで、今日こんにちまでどうかしの凌いで来たように客が来ると吹聴ふいちようしていた。その父が、母の書信

によると、庭へ出て何かしている機はずみに突然眩暈めまいがして引ッ繰り返った。家内かないのものは軽症のういっけつの脳溢血と思  
い違えて、すぐその手当をした。後あとで医者からどう  
もそうではないらしい、やはり持病の結果だろうと  
いう判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び付け  
て考えるようになったのである。

冬休みが来るにはまだ少し間まがあつた。私は学期  
の終りまで待っていても差支さしつかえあるまいと思つて一

日二日そのままにしておいた。するとその一日二日の間に、父の寝ている様子だの、母の心配している顔だのが時々眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗<sup>な</sup>めた私は、とうとう帰る決心をした。国から旅費を送らせる手数<sup>てかず</sup>と時間を省くため、私は暇乞<sup>いとまご</sup>いかたがた先生の所へ行つて、要<sup>い</sup>るだけの金を一時立て替えてもらう事にした。

先生は少し風邪<sup>かぜ</sup>の気味で、座敷へ出るのが臆<sup>おっくう</sup>劫だ

といつて、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸ガラスどから冬に入いって稀まれに見るような懐かしい和やわらかな日光が机掛つくえかけの上に射さしていた。先生はこの日あたりの好いい室へやの中へ大きな火鉢を置いて、五徳ごとくの上に懸かけた金盥かなだらから立あち上ある湯気ゆげで、呼吸いきの苦しくなるのを防いでいた。

「大病は好いいが、ちよつとした風邪かぜなどはかえつて厭いやなものですね」といった先生は、苦笑しながら私



の顔を見た。

先生は病氣という病氣をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑いたくなくなった。

「私は風邪ぐらいなら我慢しますが、それ以上の病氣は真平まっぴらです。先生だって同じ事でしょう。試みにやつてご覧になるとよく解わかります」

「そうかね。私は病氣になるくらいなら、死病に罹かかりたいと思つてる」

私は先生のいう事に格別注意を払わなかった。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

「そりや困るでしょう。そのくらいなら今手元にあるはずだから持って行きたまえ」

先生は奥さんと呼んで、必要の金額を私の前に並べさせてくれた。それを奥の茶箆ちやだんすか何かの抽出ひきだしから出して来た奥さんは、白い半紙の上へ鄭寧ていねいに重ねて、「そりやご心配ですね」といった。

「何遍なんべんも卒倒したんですか」と先生が聞いた。

「手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか」

「ええ」

先生の奥さんの母親という人も私の父と同じ病気で亡くなったのだという事が始めて私に解った。

「どうせむずかしいんでしょう」と私がいった。

「そうさね。私が代られれば代ってあげても好いいが。」

——はきけ嘔気はあるんですか」

「どうですか、何とも書いてないから、おおかた大方ないんでしょう」

「吐気さえ来なければまだ大丈夫ですよ」と奥さんがいった。

私はその晩の汽車で東京を立った。

## 二十二

父の病気は思ったほど悪くはなかった。それでも

着いた時は、床とこの上に胡坐あぐらをかいて、「みんなが心

配するから、まあ我慢してこう凝じつとしている。なに

もう起きても好いいのさ」といった。しかしその翌日よくじつ

からは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げ

させてしまった。母は不承無性ふしょうぶしょうに太織ふとおりの蒲団ふとんを畳

みながら「お父さんはお前が帰って来たので、急に

気が強くおなりなんだよ」といった。私わたくしには父の拳

動がさして虚勢を張っているようにも思えなかった。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にいた。これは  
万一の事がある場合でなければ、容易に父母ちちははの顔を  
見る自由の利きかない男であつた。妹は他国へ嫁とついだ。  
これも急場の間に合うように、おいそれと呼び寄せ  
られる女ではなかつた。兄妹きょうだい三人のうちで、一番便  
利なのはやはり書生をしている私だけであつた。そ  
の私が母のいい付け通り学校の課業を放ほうり出して、

休み前に帰って来たという事が、父には大きな満足であつた。

「これしきの病気に学校を休ませては気の毒だ。お母さんがあまり仰山ぎょうさんな手紙を書くものだからいけない」

父は口ではこういつた。こういつたばかりでなく、今まで敷いていた床とこを上げさせて、いつものような元気を示した。

「あんまり軽はずみをしてまた逆回おりかえすといけませ  
んよ」

私のこの注意を父は愉快そうにしかし極きわめて軽く  
受けた。

「なに大丈夫、これでいつものように要心ようじんさえして  
いれば」

実際父は大丈夫らしかった。家の中を自由に往来  
して、息も切れなければ、眩暈めまいも感じなかった。た



だ顔色だけは普通の人よりも大変悪かったが、これはまた今始まった症状でもないのです、私たちは格別それを気に留めなかった。

私は先生に手紙を書いて恩借おんしゃくの礼を述べた。正月

上京する時に持参するからそれまで待つてくれるようにと断わった。そうして父の病状の思ったほど陰悪でない事、この分なら当分安心な事、眩暈はきけも嘔気ふうじやも皆無な事などを書き連ねた。最後に先生の風邪に

ついても一言の<sup>いちごん</sup>見舞を附<sup>つ</sup>け加えた。私は先生の風邪を實際軽く見ていたので。

私はその手紙を出す時に決して先生の返事を予期していなかった。出した後で父や母と先生の<sup>うわさ</sup>噂などをしながら、遥<sup>はる</sup>かに先生の書斎を想像した。

「こんど東京へ行くときには椎茸<sup>しいたけ</sup>でも持って行ってお上げ」

「ええ、しかし先生が干した椎茸などを食うか

しら」

「旨うまくはないが、別に嫌きらいな人もないだろう」

私には椎茸と先生を結び付けて考えるのが変であつた。

先生の返事が来た時、私はちよつと驚かされた。

ことにその内容が特別の用件を含んでいなかった時、驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思った。そう思うと、その簡単な

一本の手紙が私には大層な喜びになった。もつともこれは私が先生から受け取った第一の手紙には相違なかったが。

第一というと私と先生の間に書信の往復がたびたびあったように思われるが、事實は決してそうでない事をちよつと断わっておきたい。私は先生の生前にたった二通の手紙しか貰<sup>もら</sup>っていない。その一通は今いうこの簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ

前とくに私宛あてで書いた大変長いものである。

父は病気の性質として、運動を慎まなければなら  
ないので、床を上げてからも、ほとんど戸外そとへは出  
なかった。一度天気のごく穏やかな日の午後庭へ下  
りた事があるが、その時は万一を気遣きづって、私が引  
き添そばうように傍に付いていた。私が心配して自分の  
肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑って応じな  
かった。

## 二十三

わたくし

私は退屈な父の相手としてよく将碁盤しょうぎばんに向かった。

二人とも無精な性質たちなので、炬燵こたつにあたったまま、

盤を櫓やぐらの上へ載せて、駒こまを動かすたびに、わざわざ

手を掛蒲団かけぶとんの下から出すような事をした。時々持駒もちこま

を失くして、次の勝負の来るまで双方とも知らずに

いたりした。それを母が灰の中から見付け出して、

ひばし

はさ

こっけい

火箸で挟み上げるといふ滑稽こっけいもあつた。

「碁だごと盤が高過ぎる上に、足が着きいているから、炬燵の上では打てないが、そこへ来ると将碁盤は好いいね、こうして楽に差せるから。無精者には持ッて来いだ。もう一番やろう」

父は勝った時は必ずもう一番やろうといった。そのくせ負けた時にも、もう一番やろうといった。要するに、勝っても負けても、炬燵にあたって、将碁を差したがる男であつた。始めのうちは珍しいので、

この隠居いんきよじみた娯楽が私にも相当の興味を与えたが、少し時日が経たつに伴っれて、若い私の気力はそのくらいな刺戟しげきで満足できなくなった。私は金きんや香車きやうしやを握った拳こぶしを頭の上へ伸ばして、時々思い切ったあくびをした。

私は東京の事を考えた。そうして漲みなぎる心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動こどうを聞いた。不思議にもその鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、



先生の力で強められているように感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。両方とも世間から見れば、生きているか死んでいるか分らないほど大人しい男であつた。他に認められるという点からいえばどっちも零れいであつた。それでいて、この将碁を差したがる父は、単なる娯楽の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のためゆききに往来をした覚えおぼのない先生は、歡樂の交際から出

る親しみ以上に、いつか私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷やか過ぎるから、私は胸といい直したい。肉のなかに先生の力が喰い込んでいるといっても、血のなかに先生の命が流れているといっても、その時の私には少しも誇張でないように思われた。私は父が私の本当の父であり、先生はまたいうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、ことさらに眼の前に並べてみて、始め

て大きな真理でも発見したかのごとくに驚いた。

私がのつそつし出すと前後して、父や母の眼にも

今まで珍しかった私が段々陳腐ちんぷになつて来た。これ

は夏休みなどに国へ帰る誰でもが一樣に経験する心

持だろふと思うが、当座の一週間ぐらいは下にも置

かないように、ちやほや歓待もてなされるのに、その峠を

定規通り通り越すと、あととはそろそろ家族の熱が冷

めて来て、しまいには有つても無くつても構わない

もののように粗末に取り扱われがちになるものである。私も滞在中にその峠を通り越した。その上私は国へ帰るたびに、父にも母にも解わからない変なところを東京から持って帰った。昔でいうと、儒者じゅしやの家へ切支丹キリシタンの臭いにおを持ち込むように、私の持って帰るものは父とも母とも調和しなかった。無論私はそれを隠していた。けれども元々身に着いているものだから、出すまいと思つても、いつかそれが父や母の眼

に留<sup>と</sup>まつた。私はつい面白くなかった。早く東京へ歸りたくなつた。

父の病氣は幸い現状維持のまま、少しも悪い方へ進む模様は見えなかった。念のためにわざわざ遠くから相当の医者を招いたりして、慎重に診察してもらつてもやはり私の知っている以外に異状は認められなかった。私は冬休みの尽きる少し前に国を立つ事にした。立つといい出すと、人情は妙なもので、

父も母も反対した。

「もう帰るのかい、まだ早いじゃないか」と母がいった。

「まだ四、五日いても間に合うんだろう」と父がいった。

私は自分の極めた出立の日を動かさなかつた。

## 二十四

東京へ帰ってみると、松飾はいつか取り払われて

いた。町は寒い風の吹くに任せて、どこを見てもこれというほどの正月めいた景気はなかった。

わたくし さっそく

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の

しいたけ

椎茸もついでに持つて行つた。ただ出すのは少し変

だから、母がこれを差し上げてくれといいましたと  
わざわざ断つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい  
菓子折に入れてあつた。鄭寧に礼を述べた奥さんは、

ていねい

次の間へ立つ時、その折を持つて見て、軽いのに驚

かされたのか、「こりや何の御菓子おかし」と聞いた。奥さんは懇意になると、こんなところに極めて淡泊なたんぱく小供こどもらしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色々掛念けねんの問いを繰り返してくれた中に、先生はこんな事をいった。

「なるほど容体ようたいを聞くと、今が今どうという事もないようですが、病氣が病氣だからよほど気をつけないといけません」



先生は腎臓じんぞうの病やまいについて私の知らない事を多く知っていた。

「自分で病気に罹かかっていながら、気が付かないで平気でいるのがあの病の特色です。私の知ったある士官しかんは、とうとうそれでやられたが、全く嘘うそのような死に方をしたんですよ。何しろ傍そばに寝ていた細君さいくんが看病をする暇もなんにもないくらいなんですからね。夜中にちよつと苦しいといって、細君を起した

ぎり、翌あくる朝はもう死んでいたんです。しかも細君は夫が寝ているとばかり思ってたんだっていうんだから」

今まで楽天的に傾いていた私は急に不安になった。

「私の父おやじもそんなになるでしょうか。ならんともいえないですね」

「医者は何というのです」

「医者<sup>とても</sup>は到底治らないというんです。けれども当分

のところ心配はあるまいともいうんです」

「それじゃ好<sup>い</sup>いでしょう。医者がそういうなら。私の今話したのは気が付かずにいた人の事で、しかもそれがずいぶん乱暴な軍人なんだから」

私はやや安心した。私の変化を凝<sup>じっ</sup>と見ていた先生は、それからこう付け足した。

「しかし人間は健康にしる病気にしろ、どっちにし

ても脆いもろものですね。いつどんな事でどんな死によ  
うをしないとも限らないから」

「先生もそんな事を考えてお出いでですか」

「いくら丈夫の私でも、満更考まんざらえない事もありま  
せん」

先生の口元には微笑の影が見えた。

「よくころりと死ぬ人があるじゃありませんか。自  
然に。それからあつと思まう間に死ぬ人もあるでしょ

う。不自然な暴力で」

「不自然な暴力って何ですか」

「何だかそれは私にも解<sup>わか</sup>らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使うんでしょう」

「すると殺されるのも、やはり不自然な暴力のお蔭<sup>かげ</sup>ですね」

「殺される方はちっとも考えていなかった。なるほどそういえばそうだ」

その日はそれで帰った。帰ってから父の病氣はそれほど苦にならなかった。先生のいった自然に死ぬとか、不自然の暴力で死ぬとかいう言葉も、その場限りの浅い印象を与えただけで、後は何らの<sup>あと</sup>こだわりを私の頭に残さなかった。私は今まで幾度か手<sup>いくたび</sup>を着けようとしては手を引っ込めた卒業論文を、いよいよ本式に書き始めなければならぬと思い出した。

## 二十五

その年の六月に卒業するはずの私は、わたくしぜひともこの論文を成規通りせいきどお四月いっばいに書き上げてしまわなければならなかった。二、三、四と指を折って余る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑うたぐった。他ほかのものはよほど前から材料を蒐あつめたり、ノートを溜ためたりして、余所目にも忙いそしそうに見えるのに、私だけはまだ何にも手を着けずにいた。私

にはただ年が改まったら大いにやろうという決心だけがあつた。私はその決心でやり出した。そうして

忽ち動けなくなつた。今まで大きな問題を空に描い

たちま

くう

えが

て、骨組みだけはほぼでき上っているくらいに考え

ていた私は、頭を抑えておさ悩み始めた。私はそれから

論文の問題を小さくした。そうして練り上げた思想

を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中

ま

にある材料を並べて、それに相当な結論をちよつと



付け加える事にした。

私の選択した問題は先生の専門と縁故の近いものであった。私がかつてその選択について先生の意見を尋ねた時、先生は好いでしょうといった。狼狽ろうばいした気味の私は、早速さっそく先生の所へ出掛けて、私の読まなければならない参考書を聞いた。先生は自分の知っている限りの知識を、快く私に与えてくれた上に、必要の書物を、二、三冊貸そうといった。しかし先

生はこの点について毫ごうも私を指導する任に当ろうとしなかった。

「近頃ちかごろはあんまり書物を読まないから、新しい事は知りませんよ。学校の先生に聞いた方が好いでしょう」

先生は一時非常の読書家であつたが、その後ごどういう訳か、前ほどこの方面に興味が働かなくなつたようだ、かつて奥さんから聞いた事があるのを、

私はその時ふと思い出した。私は論文をよそにして、そぞろに口を開いた。

「先生はなぜ元のように書物に興味をもち得ないんですか」

「なぜという訳ありませんが。……つまりいくら本を読んでもそれほどえらくならないと思うせいでしょう。それから……」

「それから、まだあるんですか」

「まだあるというほどの理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らないと恥のようにきまりが悪かったものだが、近頃は知らないという事が、それほどの恥でないように見え出したものだから、つい無理にも本を読んでみようという元気が出なくなつたのでしよう。まあ早くいえば老い込んだのです」

先生の言葉はむしろ平静であつた。世間に背中を

向けた人の苦味くみを帯びていなかっただけに、私には  
それほどの手応てごたえもなかった。私は先生を老い込ん  
だとも思わない代りに、偉いとも感心せずに帰った。

それからの私はほとんど論文に崇たられた精神病者  
のように眼を赤くして苦しんだ。私は一年前ぜんに卒業  
した友達について、色々様子を聞いてみたりした。

そのうちの一人いちにんは締切しめきりの日に車で事務所へ馳かけつけ

ようや

て漸く間に合わせたといった。他の一人は五時を十

おく

五分ほど後らして持つて行つたため、危く跳ね付け

あやう

は

られようとしたところを、主任教授の好意でやつと

受理してもらつたといった。私は不安を感じると共

す

に度胸を据えた。毎日机の前で精根のつづく限り働

いた。でなければ、薄暗い書庫にはいつて、高い本

みまわ

棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が

こつと

骨董でも掘り出す時のように背表紙の金文字をあさ

った。

梅が咲くにつけて寒い風は段々向を南へ更かえて行  
った。それが一仕切経ひとしきりつと、桜の噂うわさがちらほら私の  
耳に聞こえ出した。それでも私は馬車馬のように正  
面ばかり見て、論文に鞭むちうたれた。私はついに四月  
の下旬が来て、やっと予定通りのものを書き上げる  
まで、先生の敷居を跨またがなかった。

わたくし

私の自由になったのは、八重桜やえざくらの散った枝にいつ

しか青い葉が霞かすむように伸び始める初夏の季節であ

った。私は籠かごを抜け出した小鳥の心をもって、広い

天地を一目ひとめに見渡しながら、自由に羽搏はばたきをした。

私はすぐ先生の家うちへ行った。枳殼からたちの垣が黒ずんだ枝

の上に、萌もえるような芽を吹いていたり、柘榴ざくろの枯れ

た幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔らかそう

に日光を映していたりするのが、道々私の眼を引き



付けた。私は生れて初めてそんなものを見るような  
珍しさを覚えた。

先生は嬉し<sup>うれ</sup>そうな私の顔を見て、「もう論文は片  
付いたんですか、結構ですね」といった。私は「お  
蔭<sup>かげ</sup>でようやく済みました。もう何にもする事はない  
ません」といった。

実際その時の私は、自分のなすべきすべての仕事  
がすでに結了<sup>けつりょう</sup>して、これから先は威張って遊んでい

ても構わないような晴やかな心持でいた。私は書き上げた自分の論文に対して充分の自信と満足をもっていた。私は先生の前で、しきりにその内容を喋々ちやうちやうした。先生はいつもの調子で、「なるほど」とか、「そうですか」とかいつてくれたが、それ以上の批評は少しも加えなかった。私は物足りないというよりも、聊ちやうか拍子抜けの気味であつた。それでもその日私の気力は、因循いんじゆんらしく見える先生の態度に逆襲

を試みるほどに生々いきいきしていた。私は青く蘇生よみがえろうとする大きな自然の中に、先生を誘い出そうとした。「先生どこかへ散歩しましょう。外へ出ると大変好いい心持です」

「どこへ」

私はどこでも構わなかった。ただ先生を伴つれて郊外へ出たかった。

一時間の後、のち先生と私は目的どおり市を離れて、

村とも町とも区別の付かない静かな所を宛もなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔らかい葉をぎ取つて芝笛を鳴らした。ある鹿児島人を友達にもつて、その人の真似をしつつ自然に習い覚えた私は、この芝笛というものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をしてよそを向いて歩いた。

やがて若葉に鎖ざされたように蔭鬱した小高い

ひとかま

一構えの下に細い路みちが開ひらけた。門の柱に打ち付けた

標札に何々園とあるので、その個人の邸宅でない事

がすぐ知れた。先生はだらだら上のぼりになっている入

口を眺ながめて、「はいってみようか」といった。私は

すぐ「植木屋ですね」と答えた。

植込うえこみの中をひとうねりして奥へ上のぼると左側に家うちがあ

った。明け放った障子しょうじの内はがらんとして人の影も

見えなかった。ただ軒先のきりぎしに据えた大きな鉢の中に飼

つてある金魚が動いていた。

「静かだね。断わらずにはいつても構わないだらうか」

「構わないでしょう」

二人はまた奥の方へ進んだ。しかしそこにも人影は見えなかった。躑躅つつじが燃えるように咲き乱れていた。先生はそのうちで樺色かばいろの丈たけの高いのを指して、

「これは霧島きりしまでしょう」といった。

しやくやく　とつぽ

芍薬も十坪あまり一面に植え付けられていたが、

まだ季節が来ないので花を着けているのは一本もなかった。この芍薬畠はたけの傍そばにある古びた縁台のような

ものの上に先生は大の字なりに寝た。私はその余つ

た端はじの方に腰をおろして烟草タバコを吹かした。先生は蒼あお

い透すき徹とおるような空を見ていた。私は私を包む若葉

の色に心を奪われていた。その若葉の色をよくよく

眺ながめると、一々違っていた。同じ楓かえでの樹きでも同じ色

を枝に着けているものは一つもなかった。細い杉苗の頂に投げ被せてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

## 二十七

私はすぐその帽子を取り上げた。所々に着いてい<sup>わたくし</sup>る赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。<sup>つめ</sup><sup>はじ</sup>

「先生帽子が落ちました」

「ありがとう」



からだ  
身体を半分起してそれを受け取った先生は、起き

るとも寝るとも片付かないその姿勢のまま、変な事を私に聞いた。

「突然だが、君の家には財産がよつぽどあるんですか」

「あるというほどありません」

「まあどのくらいあるのかね。失礼のようだが」

「どのくらいって、山と田地が少しあるぎり、金

なんかまるでないんでしょう」

先生が私の家の経済いえについて、問いらしい問いを掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに関して、何も聞いた事がなかつた。

先生と知り合いになつた始め、私は先生がどうして遊んでいられるかを疑うたぐつた。その後もこの疑いは絶えず私の胸を去らなかつた。しかし私はそんな露骨あらわな問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけとばかり

思つていつでも控えていた。若葉の色で疲れた眼を休ませていた私の心は、偶然またその疑いに触れた。

「先生はどんなんです。どのくらいの財産をもつていらつしやるんですか」

「私は財産家と見えますか」

先生は平生からむしろ質素な服装なりをしていた。それに家内かないは小人数こにんずであつた。したがって住宅も決し

て広くはなかった。けれどもその生活の物質的に豊かな事は、内輪にはいり込まない私の眼にさえ明らかであつた。要するに先生の暮しは贅沢ぜいたくといえないまでも、あたじけなく切り詰めた無弾力性のものではなかった。

「そうでしょう」と私がいった。

「そりやそのくらいの金はあるさ、けれども決して財産家じゃありません。財産家ならもっと大きな家うち

でも造るさ」

この時先生は起き上つて、縁台の上に胡坐あぐらをかい  
ていたが、こういい終ると、竹の杖つえの先で地面の上  
へ円のようなものを描かき始めた。それが済むと、今  
度はステツキを突き刺すように真直まっすぐに立てた。

「これでも元は財産家なんだがなあ」

先生の言葉は半分独り言ひとごとのようであつた。それで  
すぐ後あとに尾ついて行き損なつた私は、つい黙っていた。

「これでも元は財産家なんですよ、君」といい直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答えなかった。むしろ不調法で答えられなかったのである。すると先生がまた問題を他へ移した。よそ

「あなたのお父さんの病気はその後どうになりました」

私は父の病気について正月以後何にも知らなかった。月々国から送ってくれる為替かわせと共に来る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟しゅせきであつたが、病気の訴えはそのうちにほとんど見当らなかつた。その上書体も確かであつた。この種の病人に見る顫えふるが少しも筆の運びはこを乱していなかつた。

「何ともいつて来ませんが、もう好いいでしよう」  
「好よければ結構だが、——病症が病症なんだか

らね」

「やっぱり駄目ですかね。でも当分は持ち合ってる  
んでしょう。何ともいつて来ませんよ」

「そうですか」

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の  
病気を尋ねたりするのを、普通の談話——胸に浮か  
んだままをその通り口にする、普通の談話と思って  
聞いていた。ところが先生の言葉の底には両方を結



び付ける大きな意味があつた。先生自身の経験を持たない私は無論そこに気が付くはずがなかつた。

## 二十八

「君のうちに財産があるなら、今のうちによく始末をつけてもらつておかないといけないと思うがね、余計なお世話だけれども。君のお父さんが達者なうちに、貰<sup>もら</sup>うものはちゃんと貰つておくようにしたらどうですか。万一の事があつたあとで、一番面倒の

起るのは財産の問題だから」

「ええ」

わたくし

私は先生の言葉に大した注意を払わなかった。私の家庭でそんな心配をしているものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じていた。その上先生のいう事の、先生として、あまりに實際的なのに私は少し驚かされた。しかしそこは年長者に対する平生の敬意が私を無口にした。

「あなたのお父さんが亡くなられるのを、今から予想してかかるような言葉遣いことばづかをするのが氣に触さわったから許してくれたまえ。しかし人間は死ぬものだからね。どんなに達者なものでも、いつ死ぬか分らないものだからね」

先生の口氣こうきは珍しく苦々しかった。

「そんな事をちつとも氣に掛けちゃいけません」と私は弁解した。

「君の兄弟きょうだいは何人でしたかね」と先生が聞いた。

先生はその上に私の家族の人数にんずを聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父おじや叔母おばの様子を問いなどした。そうして最後にこういった。

「みんな善いい人ですか」

「別に悪い人間というほどのものもないようです。  
大抵田舎者いなかものですから」

「田舎者はなぜ悪くないんですか」

私はこの追窮ついきゅうに苦しんだ。しかし先生は私に返事

を考えさせる余裕さえ与えなかった。

「田舎者は都会のものより、かえって悪いくらいなもの  
です。それから、君は今、君の親戚しんせきなぞの中に、  
うち

これといって、悪い人間はいないようだといいまし  
たね。しかし悪い人間という一種の人間が世の中に  
あると君は思っているんですか。そんな鑄型いかにたに入れ  
たような悪人は世の中にあるはずがありませんよ。

平生はみんな善人なんです。少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざという間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断が  
できないんです」

先生のいう事は、ここで切れる様子もなかった。

私はまたここで何かいおうとした。すると後ろの方  
で犬が急に吠<sup>ほ</sup>え出した。先生も私も驚いて後ろを振り返った。

縁台の横から後部へ掛けて植え付けてある杉苗の  
傍に、<sup>そば</sup>熊笹が<sup>くまざさ</sup>三坪ほど地を隠すように茂って生えて  
いた。犬はその顔と背を熊笹の上に現わして、盛ん  
に吠え立てた。そこへ<sup>とお</sup>十ぐらいの小供が<sup>こども</sup>馳<sup>か</sup>けて来て  
犬を叱<sup>しか</sup>り付けた。小供は徽章<sup>きしょう</sup>の着いた黒い帽子を被<sup>かぶ</sup>  
ったまま先生の前へ廻<sup>まわ</sup>って礼をした。

「叔父さん、はいって来る時、家<sup>うち</sup>に誰<sup>だれ</sup>もいなかった  
かい」と聞いた。

「誰もいなかったよ」

「姉さんやおつかさんが勝手の方にいたのに」

「そうか、いたのかい」

「ああ。叔父さん、今日こんちはって、断ってはいって来

ると好よかったのに」

先生は苦笑した。懐中ふところから墓口がまぐちを出して、五銭の

白銅はくどうを小供の手に握らせた。

「おつかさんにそういつとくれ。少しここで休まし



て下さいって」

小供は<sup>りこう</sup>伶俐りこうそうな眼に<sup>わら</sup>笑わらいを<sup>みなぎ</sup>漲みなぎらして、<sup>うなず</sup>首肯うなずいて

見せた。

「今<sup>せつこうちよう</sup>斥候長せつこうちようになつてるところなんだよ」

小供はこう断つて、<sup>つつじ</sup>躑躅つつじの間を下の方へ駈け下り

て行つた。犬も<sup>しっぽ</sup>尻尾しっぽを高く巻いて小供の後を追ひ掛

けた。しばらくすると同じくらいの年格好の小供が

二、三人、これも斥候長の下りて行つた方へ駈けて

いった。

私は妻を<sup>さい</sup>残して行きます。私がいなくなっても妻に衣食住の心配がないのは<sup>しあわ</sup>仕合せです。私は妻に残酷な<sup>きょうふ</sup>驚怖を与える事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬつもりです。妻の知らない<sup>ま</sup>間に、こっそりこの世からいなくなるようにします。私は死んだ後で、妻から<sup>とんし</sup>頓死したと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足なのです。

私が死のうと決心してから、もう十日以上になります。その大部分はあなたにこの長い自叙伝の一節を書き残すために使用されたものと思つて下さい。始めはあなたに会つて話をする気でいたのですが、書いてみると、かえつてその方が自分を判然描き出す事ができたような心持がして嬉しいのです。私は酔興すいきように書くものではありません。私を生んだ私の過去は、人間の経験の一部分として、私より外ほかに誰も語

り得るものはないのですから、それを偽りなく書き

残して置く私の努力は、人間を知る上において、あ

なたにとつても、外の人にとつても、徒勞ではなか

ろうと思います。渡辺華山は邯鄲わたなべかざん かんたんという画えを描かくた

めに、死期を一週間繰り延べたという話をつい先達せんだつ

て聞きました。他ひとから見たら余計な事のようにも解

釈できましようが、当人にはまた当人相応の要求が

心の中うちにあるのだからやむをえないともいわれるで

しよう。私の努力も単にあなたに対する約束を果たすためばかりではありません。半なかば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

しかし私は今その要求を果たしました。もう何にもする事はありません。この手紙があなたの手に落ちる頃ころには、私はもうこの世にはいないでしょう。

とくに死んでいるでしょう。妻は十日ばかり前から市ヶ谷いちがやの叔母おばの所へ行きました。叔母が病気で手が